

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

森浩一著

『巨大古墳の世紀』

(岩波書店 新書判
二三四頁 三八〇円)

巨大古墳とは、墳丘の長さ一六〇メートル以上の大型の古墳をいい、全国に五六基あるという。本書は、古墳研究の基本的な概念や問題点を、著者じしんの豊富な実地経験や先行諸学説を踏まえながら巧みに解説し(一)「仁徳陵から大山古墳へ」、(二)「空からみた巨大古墳」、三、「地図と文献にあらわれた古墳群」、巨大古墳とりわけ墳丘の長さ四一八メートル以上の大山古墳と菅田山古墳の二基に焦点をすえて、古代史上の位置づけを試みた書物である。

仁徳陵を大山古墳に、応神陵を菅田山古墳に呼びかえるという年来の主張は、著者の研究姿勢を端的に示す一例であるが、これによって、実のところは厳密な証明を經ていない仁徳・応神陵比定説の呪縛や、古事記・日本書紀の記事から解き放たれ、改めて真の考古学的検討が可能になるのである。

著者は、これまで蓄積した「巨大古墳についての資料をできるだけ紹介」(あとがき)しながら、大山古墳の諸問題を述べて明治五年の「盗掘」関係資料を追いつ(四「大山古墳を考ふる」)、出土した円筒埴輪・長持型石棺・鍍金の甲冑・ガラス器、そしてポストン美術館所蔵の銅鏡・環頭の年代検討に基づき、大山古墳は「五世紀末から六世紀初頭」の築造という年代観を提示する(五「年代をさぐる」)。このことから、大山古墳は五世紀前半の大王とされる仁徳天皇とは無縁となり、しかもそれら出土物には東北アジア騎馬文化の強烈な影響もうかがえることから、大山古墳など河内に集中する巨大古墳の被葬者は、中国南朝と交流したいわゆる「倭の五王」とも異質であ

ることも明らかになる。さらには、百舌鳥古市古墳群の地理的特色を「河内湖」を媒介として検討することにより、この地方に集中する巨大古墳の被葬者を「治水王」という性格でとらえるべきことを提唱するのである。

大阪に生れ、堺に育った著者が大山古墳を意識しはじめたのは中学一年の時という。それ以来、やがて四十年になるうかという永年のねばり強い追究が縦糸となり、ここ数年の中国・朝鮮各地の旅に基づく広大な東アジア的視野が横糸となって織りなされた本書は、コンパクトながら密度の濃い「古墳学」の書といえよう。

竹居明男(大学文学部専任講師)

三輪茂雄著

『粉の秘密・砂の謎』

(平凡社 B5判
二七一頁 一、六〇〇円)

本書の著者には『石臼の謎』、『石臼探訪』、『臼』、『粉と粒の不思議』等の書があり、本書を加えて五冊の名著を出したのであるが、それを六年間にしあげたのは驚嘆に値する。これらの本のうち一冊でも、手

にとつてみればわかるように、全国にわたる調査と文献探索の時間は相当と思われ。また執筆や校正などの時間を加えれば、ここ数年間の教授は不眠不休の日常であつたであらう。

これらの著書はいずれも教授の専門の粉体工学の見地から、前三者は粉を製する臼を技術的に追究したもので、いわば「臼の日本史」であり、あとの二書は粉の考察であり、これは「粉の日本史」といえるであらう。今まで誰もしたことのない臼と粉を通じて、日本文化の新しい分野を開拓したところに、教授の面目躍如たるものがある。

さて、本書は朝日新聞社の「アサヒグラフ」に一年余り連載した「粉体雑話」を一冊にまとめたもので、大きく四つに分けられている。その一つは食物としての粉、第二は食物以外の粉と人間生活のかかわりあり、第三は粉を製する諸道具、第四は粒と人間生活の関係を記述したものである。与えられた紙面もこのあとあまりないが、本書を読んで教えられたことを若干紹介してみよう。

こんにやくは今の茨城県、江戸時代の水戸藩が主産地で、これと紙は水戸藩の国産品で、これらを他藩に販売して得た金が幕末志士の行動費になつたが、こんにやくを商品として遠隔地に輸送しようにしたのは、教授によると「乾式精粉法」が発明されてからで、それは安永年間に中島藤衛門が一〇年間の工夫によってなされたといふ。これは私には大変に興味を感じた。

また米のご飯をうまくする法として「米研ぎ工学」が紹介されている。これは白米に糠や各種のごみ、バクテリア、精米所の研磨材が付着しているのので、これを除くことが米研ぎの目的である。また米はよく乾燥させてあるので、水に浸すと急速に表面から吸水するから、手ぎわよく最初の濁り水を代えてやらないと、きたない洗いが内部に吸収されて、炊いたご飯が糠くさい。要は濁り水をすっかり流し出すのがコツであるといふ。これは若い主婦の方々に大変に参考になる。本書には今あげたように、身近な生活を見直す例を沢山あげるので一読をすすめたい。

岡 光夫（工学経済学部教授）

北垣宗治著

Muneharu Kitagaki: Principles and Problems of Translation in Seventeenth-Century England

（山口書店 A5判 三九九頁 八、〇〇〇円）

言うまでもなく、イギリス文化はヨーロッパ大陸とたえず深い関係をたもちながら育ってきたのであり、中世から現代にいたるどの時代を考へても、イギリス文学を十分に理解するためにはヨーロッパ文学、とくにギリシア・ローマ古典文学とのかかわりを無視することはできない。外国文学受容におけるもっとも重要な接点の一つは翻訳であり、どのような作品をどのように訳すべきかは単に翻訳技術の問題ではなく、外国文化受容の基本的態度にかかわる問題である。

北垣宗治教授の新著は、十七世紀のイギリスにおける翻訳の諸問題、とくにギリシア・ローマ古典文学の翻訳にあたってさまざまな翻訳者がどのような立場をとったかという問題を中心に論じたものである。このテーマは著者が長年にわたつてとりく

でこられたものであり、その成果がこのようなかたちで世に問われることになったことは誠によきことである。

本書は、はじめに四世紀から五世紀にかけて聖書研究、とくに聖書のラテン語訳において不朽の業績をのこしたセント・ジェロームの翻訳観をヨーロッパにおける翻訳の系譜の重要な基点としてとらえ、一六一一年に完成した欽定訳聖書における翻訳の問題、ついで十七世紀前半における翻訳観をベン・ジョンソン、ジョージ・チャップマンなどを中心に論じ、つぎに十七世紀後半を代表する詩人ジョン・ドライデンの場合を論じている。

詩作、劇作の面でもすぐれた業績をのこしたドライデンは、翻訳者としても立派な仕事をのこし、また理想的な翻訳はどうかあるべきかという問題についても真剣に考えるべきである。著者のドライデン研究は大学院在学当時から続けられてきたものであり、ドライデンを論じた第四章は本書の中核をなすものである。同章は翻訳の実践者としてのドライデンと翻訳理論の追求者としてのドライデンの両面から翻訳の分野で彼が果たし

た業績の意義を緻密に、そして明快に論究している。

英米においてはこの時代の翻訳の問題をとりあつかった研究書がこれまで何冊か出版されているが、北垣教授の新書はこれら先学の研究をのりこえようとするものがあり、「井の中の蛙」になりがちなわが国の外国文学研究者にとっては大いに範とすべき書物であると思う。

昨今わが国においても翻訳のあり方がさまざまに論じられている。本書は英文で書かれており、著者の博士学位論文でもあって、手軽に読める一般書ではないが、イギリス文学の学徒のみならず、翻訳の問題に興味をもつ人々にとっても貴重な示唆に富む書物である。

高山 修（女子大学教授）

玉置保巳著

詩集『石垣の上の家』

（潮流社 A5判
一〇一頁 一五〇〇円）

幼年期の体験とは、成人した者にとって何であろうか。玉置保巳氏はそれを、自身の現存在の本質を形成するものと見ておら

れるように思う。

氏の第三詩集『石垣の上の家』の印象は、そういう認識につよく結びつくものであった。

幼年期をふくめて成長期の体験は、持続してつねに意識されているというわけのものではないが、むしろそのゆえにかえって、現実の本質的部分に深くくいついているともいえる。伏流のように意識下に隠れていて、なにかのはずみに意識の世界へ入りでる。

玉置氏はその意識された世界を、ことさら分析も解釈もされない。おそらくそこに氏の方法があるであろうが、想起された世界を丹念にスケッチし、そのスケッチによって再構成されるのだ。緻密な描写力のせいもあるが、再構成された世界は現実そのものように息づいているのである。ときとして非連続の世界が現出するのは、それが再構成された世界だからであろうが、想起の真相でもあろう。夢に似ている。

そういう世界へわけいて、作者は、寡黙で多分に空想癖のある作者自身に出会うのだ。

僕は御飯をたべるのが嫌いなので、いつまでたっても大きくなれない。カマキリのやうに痩せてゐて母に苦勞をかける。母は僕をベンチに坐らせて、レコードをかけながら、だまじだまし御飯をたべさせる。蓄音機から「双頭の鷲」のマーチが流れる。淋しい真昼間、軍靴の音をひびかせて、下の通りを兵隊さんの隊列がとほりすぎてゆく。

〔夏の日〕部分

スケッチによって再構成した世界といったが、その世界からは、風景と、風景のなかのごくわずかな動物と人間以外は、ほぼ完全に捨棄されて、虚しいほど透明である。その透明な風景のなかに、ほぼ例外なく確かな位置が与えられているのは、ものいわぬさまざまな植物だが、この構図は原体験の様相を暗示するのみでなく、現在の作者の内部に、相似型にもせよ生きつつけていることを感じさせる。

植物について、風景のなかに位置を占めることが多いのは家である。外部の輪郭のみあざやかで、内に謎の部分を感じつつこ

には執着する別の理由があるのだろうか。わたしは幼いとき、よその家へ入るのが怖かった。いまもって苦手である。

河野仁昭（社史史料編集所事務主任）

三宅一郎・村松岐夫編

『京都市政治の動態——大都市政治の総合的分析』

（有斐閣 A5判
四七九頁 六、八〇〇円）

地方政治は最近多くの人々の関心をよび、これについて書かれたものも次第にその厚みをましてきた。しかし京都と言う都市の政治に多様な側面から光をあて、その全体の構造をあたかもパノラマのようにして明示してみせる本書は、地方について書かれた最近の類書のなかでも一頭地を抜きんでたすぐれた著作である、と言ってよい。おそらく本書は、戦後の日本政治学界が生み出した数少ない傑作の一つとして記憶されることにならう。

この本でまず印象的なのはその問題意識の鮮明さである。すなわち従来地方政治はともすれば中央政府の意のままに左右される付属物とみなされるのがつねであった。

しかし著者たちはそうした「常識」を論争的に排撃して、地方政治をそれ自体独自の意志決定のできる生き生きとした存在として解放することから出発しようとする。京都と言う都市の政治は中央に隸属するものでは決してない。それは名実ともに自律性をもった分析対象である、とされるのだ。

それゆえ、著者たちはそうした実際に生きている地方政治の政治過程や政策決定のプロセスを形成するすべてをひとつひとつ組上にのせようとする。本書をひもとく者が、次に圧倒されるのはそれらの具体的展開がいかに詳細をきわめているか、と言うことであろう。京都政治の制度や歴史についての説明はもとより、市民の社会・政治意識の様相、地域の構造、圧力団体や政党の行動、市会議員の動向、官僚や市長のリーダー・シップなど、他書のそれとは比較にならないほど実証的にかつヴィヴィッドな分析がそれである。

もとより、本書にまったく問題がないと言うわけではない。内容上強いて一つあげるとすれば、京都のような多党化議会がなぜ五党支持体制に突入したのか、それを成

立させた論理構造はなにかなど、今日的状況についての説明が(本書における山口論文、依田論文などの多くの示唆にもかかわらず)、やはりいささか不足しているように思われることである。しかし当然のことながらそれも瑣事であり、本書の価値はそれらによって少しも損なわれるものではない。本書が政治学に興味をもつ者にとってだけでなく、「地方の時代」に生きる多くの市民にとっても非常な知的興奮を与える内容を有していることは、繰り返し強調するまでもないのである。ぜひとも一読されるようおすすめしたい本である。

梅津 實(大学法学部教授)

八木鉄男・矢崎光園編

『近代法思想の展開』

(有斐閣 A5判
三二〇頁 四、八〇〇円)

本書は、法学部教授恒藤武二先生の還暦祝賀論文集である。恒藤先生は法学部の中心にあられて多くの研究者を育成してこられた。先生の薫陶を受け、学問の世界にある者は、基礎法学、公法学、私法学、政治学と広い分野に及んでいる。このように先

生の法律学における造詣は非常に深いものであるが、とりわけ、近代法思想に対する関心の強さの故に、本書は、十七〜十九世紀までの法思想に焦点をあてた論文で飾られている。

イギリスについては、ホッブスの人間観を理性的人間に求めるべきとする「ホッブスの自然権と理性的人間」(有馬忠宏)、ブラクストーンの法概念にみられる法実証主義の側面のオースティンへの連続性を説く「ブラクストーン法概念と法実証主義」(八木鉄男)、ブラクストーンの雇用関係観を批判的に分析する「ブラクストーンにおける『マスターとサーバントの関係』について」(安枝英伸)、ベンサムの内容を考察する「ベンサムの一八世紀人権文書批判」(深田三徳)、イギリス刑法近代化の先駆者ロミリーの刑法思想を分析する「イギリス一八世紀刑法思想の一断面」(大谷 實)の五篇を収める。

ドイツについては、ケルンの「古き良き法」観念の分析をとおしてドイツ近代法思想の形成を法史学の立場から問う「Fritz

Kennの法思想」(若野英夫)、プーフェンドルフの演繹的自然法論をライプニッツとの対置で論究する「自然法学の展開」(駒城鎮一)、カントの法思想にカッシーラーを通して迫る「カッシーラーのカント・ルソー問題の解釈」(舟越歌二)、法学の方法に焦点をあててサヴィニーの法思想を分析する「歴史法学と法実証主義」(坂東義雄)の四篇を収める。

フランスについては、『百科全書』中の執筆をとおしてデイドロの思想を検討する「百科全書派の法思想」(佐々木允臣)、モンテスキュー法思想の経験主義的側面を強調する「モンテスキューの法思想」(海原裕昭)、ルソー、ロベスピエールの人権思想について論ずる「一八世紀フランス人権思想の一潮流」(畑 安次)の三篇が収められている。

アメリカについては、大陸法思想の背景をもつリーバーの思考を分析することで、アメリカ法文化とヨーロッパ法文化の交流面を解明せんとする「フランシス・リーバーと解釈学」(矢崎光園)、不法行為理論誕生の背景という視点よりホームズの法思想

を分析する「アメリカにおける不法行為法理論の誕生」(藤倉皓一郎)の二篇を収める。日本に関しては、土地私有権史研究に焦点をあてて中田薫理論の特質に論究する「日本法制史学の『現在』性」(井ヶ田良治)一篇を収める。

いずれも近代法思想の内容を解明する上で貴重な論文といえ、その扱われた主題の多様性は恒藤先生の学問の広さと深さを反映するものであり、還暦祝賀の趣旨を全うするものといえよう。ただ、いまだ扱われる領域が拡がれば、近代法思想の全体像がより明らかなものとなったであろうと考える。この点から続刊の企画の待たれるところである。

釜田泰介(大学法学部教授)

『同志社百年史』について

「通史編」(全二巻)

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育(明治前半期)
第二部 キリスト教教育の受難(明治後半期)

後半期)

第三部 大学への道(大正期)

第四部 戦時下の学府(昭和前半期)

第五部 再生と発展(昭和後半期)

上野直藏総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹的権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。(中略)同志社を護るための先人たちのすまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起させるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展

開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはずである。

「資料編」(全二巻)

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていたもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」約一七〇〇ページ。

掲載写真 三二五点。
頒価・六〇〇〇円

送料不要の場合 五四〇〇円

「資料編」約二〇〇〇ページ。

頒価・二〇〇〇円送料不用の場合 一〇八〇〇円

発行・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課

(☎〇七五―二五一―三〇三八)